

知床ヒグマ対策連絡会議の対応状況

1 令和6年度第1回知床ヒグマ対策連絡会議の開催

- (1) 日時：令和6年7月11日（木）14:00～16:30
- (2) 場所：斜里町役場ウトロ支所
- (3) 関係機関：環境省、林野庁、北海道、斜里町、羅臼町、標津町、知床財団

2 概要

(1) 令和5年度ヒグマ管理計画の実施状況及び今年度のヒグマ出没状況について

令和5年度におけるヒグマの大量出没、大量捕獲により、全体的に目標の達成が厳しい状況。今年度に入ってから斜里町、羅臼町ともにゾーン4（市街地）への断続的な出没があり、大量出没前と比較してヒグマの出没状況は変わっていない。また、市街地への出没は増加していた。

(2) 今後のヒグマ管理の方向性について

①現場対応の実情に合わせた行動段階・ゾーニング変更

（斜里町におけるゾーニングの主な変更点）

- ・実態に合わせてゾーン4及びゾーン3の変更
- ・幌別川左岸エリアを特定管理地からゾーン3へ変更
- ・日の出からウトロトンネル間の道路沿いをゾーン2からゾーン3へ変更

（羅臼町におけるゾーニングの主な変更点）

- ・峯浜地区の住宅地エリアをゾーン3からゾーン4へ変更
- ・ゾーン4の範囲を道路から200mに統一
- ・ルサ～相泊間の特定管理地をカモイウンベ川右岸まで拡大等

（ヒグマ行動段階フローの変更）

- ・現行計画の記載内容について、柔軟に現場対応が可能になるように変更「その他段階3相当と判断される行動」等を追記
- 「30分以内に」などの細かい記載を削除、全体的に表を分かりやすく修正

②第3期計画に向けた管理目標（捕獲頭数の目安等）の中長期的な見直し

第2期ヒグマ管理計画では、ヒグマの個体群を将来にわたって持続的に維持することを目的に、計画期間内にメス捕獲数の上限目安を設定しているが、昨年度の大量出没、大量捕獲により計画2年目にして上限を超過。推定生息数については、1990年代後半から2000年頃の水準まで低下したと考えられ、改めて管理の考え方について検討し、計画に反映させるもの。

北海道ヒグマ管理計画との整合については、本計画はその地域計画としての位置付けであり、捕獲管理ユニットとしては「道東・宗谷（東部）」の一部となる。

道計画は保護管理ユニット毎に5年間のメス総捕獲数の上限を設けているが、当ユニット全体としては上限以内にあるため、捕獲数の制限などの措置を要しない。

なお、道では、地域別の捕獲目標設定も含め、現行期間内における計画の改定を検討している。

（知床半島ヒグマ管理計画改定の方向性）

- ・高密度の生息状況を維持する意図ではないという認識
- ・個体群の維持と被害防止のバランスに考慮した適正な生息密度のあり方について検討が必要

- ・人為的死亡数の状況や生息状況に応じて順応的に管理するため、個体数管理としての捕獲も選択肢とできるようにする。

(計画改定に係る課題)

- ・個体数管理の導入について
 - 昨年度の科学委員会での議論や過去のエゾシカ・ヒグマWGにおける経緯を踏まえ、他の有識者も横断的に学識経験者としてヒグマWGに参加してもらうようヒグマ対策連絡会議として要請を行う。
 - 座長との調整の結果、第1回WGでの参加は見送ることとなった。
- ・目安となる個体数の水準をどのように設定するか（手法やスケジュールを含め）
 - 現場としては、昨年度のような大量出没をいかに防ぐかという視点が重要

(3) 令和6年度アクションプランの実施状況について

各機関において現時点のアクションプランの確認を行い、実態に合わせた修正及び新たに実施している取組内容を追記して整理。道総研に実施いただいている個体群動態及び動向予測（計算機実験）をヒグマの適正な管理に必要な調査研究として位置づける。

(4) ヒグマDNAサンプルに係る各業務の現状と課題（問題提起）

各町、環境省、知床財団において、サンプル採取・発送業務、分析業務をそれぞれの機関が発注している状況。

(課題)

- ・業務構成が複雑かつ分散しているため、個々に事務手続きが発生し煩雑
- ・最終的な分析結果のアウトプット方法が定められていない
- ・昨年度のような想定以上のサンプリングが行われ、予算や労力等の上限を超えた場合の対応方法が不明
 - 現行の予算の枠組での対応方針について協議中。
 - 指定管理鳥獣捕獲等事業交付金など新たな財源の活用の可能性についても検討。
 - 別途、関係者協議の場を設定し、次年度業務には課題を持ち越さないよう改善策を図る。

(5) 各機関からの情報提供（事例紹介）

- ・令和6年度羅臼町獣害対策事業（デジタル田園都市交付金活用事業）
- ・知床五湖利用調整地区におけるヒグマ遭遇事例